

(資料)

REFRANERO ESPAÑOL (41)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasaniz*(ed.)

新井 藍子**

1492. Ruindades vencen señales.

悪は そのしるしを 隠す

- 整った顔と容姿には、たいてい卑しさが隠されているものである。反対の “Virtudes vencen señales. 徳は、そのしるしを隠す”の方がずっとよい。(コレアス諺集)
- 世間では、立派な容姿、身なりが通じる。たとえ、その下にどんな本性が隠されているとも外には見えない。だから、こういう諺がある，“La buena cara es carta de recomendación. 感じのいい顔は、すぐれた推薦状”(筆者の諺辞典，諺 151 を参照)，“Con el sombrero en la mano se conquista al mundo. 片手に帽子を持って，世間を征服”，“Buena gorra y buena boca, hacen más que buena bolsa. 品のいい帽子と言葉は，ふくらんでいる財布に勝る”など。
- 見た目がいいと世間では，何かととくすることが多いので，“見目は果報の基”，“見目は幸いの花”などという諺がある。反対に“姿は俗性を現す”，“衣ばかりで和尚はできぬ”というものもある。

* Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

** Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

1493. Ruin (El) de Roma, en mentándolo luego asoma.

噂を言えば主が来る

- 人々が噂をしていたその当人がまさにその場に現れたことを言う。(パロス)
- 異表現が、コレアス諺集には次のように多数ある；“En mentando (o en nombrando) al ruin de Roma, luego asoma. 同訳”，“En mentando al ruin, suele venir. 噂を言えば，えてして主が来るものである”，“Al ruin, cuando le mientan, luego viene./ Al ruin de Roma, en mentándole, luego asoma./ Al ruin que Dios mantiene, en mentándole, luego viene. 同訳”など。また，異表現で“Hablando del rey de Roma, por la puerta asoma. うわさをすれば影がさす”というもある。ここでは“ruin—卑しい奴”の代わりに“rey—王様”という単語が使われているが，上記のコレアス諺集を見ても，断然“ruin”の方が多い。同義の諺には“El lobo está en la conseja. 噂をすれば影がさす（狼の話をするとうははそこにいる）”（筆者の諺辞典，諺 744 を参照のこと），“El lobo anda en el rebaño. 狼は羊の群れに紛れ込んでいる”（同諺辞典，諺 744 を参照）などがある。
- イリバレンによると，“el ruin de Roma—ローマの卑しい奴”の“Roma”という地名には特別な意味はなく，単に“asoma—影がさす”と同音韻ということで用いられているらしい。
- スペイン王立アカデミー辞書：“ruin”とは，vil—下劣な，卑劣な，取るに足りない，bajo—（身分，地位，価値が）低い，劣った，despreciable—軽蔑に値する，卑しむべき，etc.
- 影で人の噂をしていると，まさに噂的であるその当人がその場に現われるものであるという同義の諺がこちらにもいくつかある，よく使われる“噂をすれば影”の他にも，“誘れば影さす”，“人事言えば影がさす”，“噂を言わば筵敷け”などがある。

1494. Ruin sea quien por ruin se tiene.

自ら侮りて人之を侮る

- 自分を卑しめたり侮る者は，やがて人からも卑しめられ，侮られる。
- コレアス諺集には，後半がこう続く“....., lo va a decir a la plaza. そう，皆に言う”現在では，標題の前半しか用いられていない。

例題 1：ドン・キホーテ第一部 21 章，ドン・キホーテが王様になったら，サンチョを伯爵にするという互いの願いを神様にさせていただこう。その資格は充分にあるとドン・キホーテとサンチョ，“—Hágalo Dios—repuso don Quijote—como yo deseo y tú, Sancho, has menester, y ruin sea quien por ruin se tiene... <それは，神にな>と，ドン・キホーテ。<わしが願うごとく，また，おまえに必要なごとく，していただくぞ。もちろん，みずから侮る者はあなどられるがよからう。>” (正編二，永田寛定訳)

- 例題 2：セレスティーナ第 9 幕，御主人のカリストさまは騎士，彼の愛する女性，メリベアは貴婦人だから，お互いに求めあうのに何の不思議があるかと，カリストの奉公人に娼婦がいくつかの諺を並べてこう言う，“... <Ruin sea quien por ruin se tiene.> <Las obras hacen linaje, que al fin todos somos hijos de Adán y Eva.> <Procure de ser cada uno bueno por sí, y no vaya a buscar en la nobleza de sus pasados la virtud.> 自分のことを卑しいと思う人は卑しいのでしょうよ。... どういう行いをするかによって，家柄が決まるんだよ。結局あたいらは，みんなアダムとイブの子どもなんだからね。めいめいが，自分でよくなるように，つとめりゃいいのさ。ご先祖さまが貴族だったことに値うちがあるみたいに，思わなきゃいいのよ。” (魔女セレスティーナ，大島正訳)

- 注：ここでは，社会の最下級の女の言葉を通して，セレスティーナの作者，Fernando de Rojas は，人間の価値は，家柄によるものではなく，個人その人の行いによるものである，今まで考えられてきたような固定観念から自由になるようにと説いているのである。この作品が書かれた (初版は 1499 年) 年代を考えるとこの文学作品“セレスティーナ”の思想が革新的であることが分かる。サンチョと同様に，社会の底辺にいる本も読んだことのないような無学な者たち (15, 16, 17 世紀の百姓，羊飼，女衞，娼婦，お屋敷の奉公人，女中，職人など) がしっかりとした考えを述べる手段を作者が諺とか格言に求めるのは，それなりの理由があつてのことであつた。しかし，われわれ読者は，そこに書かれている意味，高邁な思想ではなく，ドン・キホーテとサンチョの間で交わされる楽しい会話，ユーモアにあふれたエピソード，意外な展開による驚きの場面，及び，セレスティーナと娼婦たちの会話，セレスティーナとカリストの従者の間で交わされるどぎつい会話など“ドン・キホーテ”と“セレスティーナ”の両作品の一行一行を堪能すればそれで充分なのである。去る 1 月 13

日（2008年、朝日新聞）で保坂和志氏が“たいせつな本、カフカ<城>”の中でこう述べていた；“... <実存主義>だとかく現代人の疎外された姿>だとかいうようなことはわからなかった。だって、そういうことを言いたいんだったら論文でそう書けばいいじゃないか。小説は論文じゃない。朝起きたり道を歩いたりすることをわざわざ書く。そのこと自体が何かでなければおかしい。……小説とは読後に意味をうんぬんするようなものでなく、一行一行を読むという時間の中にしかない。……いま読んでいるその行で何が起きているかを見逃してしまったら小説の興奮はない。…… <現代人の疎外……>みたいな意味を言うことのなんと簡単なことか。小説は意味でなく、一つ一つの場所や動作や会話を書く。それが難しいのだ。読者もそう読めばいいのだが、やっぱりそれが一番難しいから、意味に逃げ込む。……”筆者も保坂氏の考えに全面的に賛成だ。それで引用が長くなってしまったが、“ドン・キホーテ”の作品にもごまんと解説本があるが、その中でも一番言われているのが、“理想と現実の違いをドン・キホーテとサンチョを通して作者は言いたかった”というものである。しかし、読者は、保坂氏も言っているように、小説の中でてくる一人一人の人物の体験を自分の体験として本を読みながら味わえばよいのである。—筆者

1495. Ruin señor cría ruin servidor.

この主人にして この奉公人あり

- 目下の者は、目上のやり方を真似してふるまうものであるから、上に立つ者がしっかりと下にいる者に手本を示さなければならぬ。
- 同義の諺が次のように多数ある；“Por el criado se conoce al amo. 召使いを見れば、主人が分かる”，“Como canta el abad, así responde el sacristán. 和尚が唱えるように、小坊主が答える”（筆者の諺辞典、諺 251 を参照），“Tal amo, tal criado. この主人にして、この召使いあり”，“Cual el cuervo, tal su huevo. このカラスからは、この卵”（同諺辞典、諺 320 を参照），“De tal palo, tal astilla. この棒からは、このかけら”，“Cual el autor, tal la obra. この作者にして、この作品あり”，“Cual el dueño, tal el perro. この飼い主にして、この犬あり”，“Ruin pájaro, ruin cantar. 哀れな鳥は、哀れに歌う”（基が悪ければ、結果も悪い、それ以上のことは期待できない）など。
- 標題の諺及び一連の諺は、上に立つ者の言動がよくないと下にいる者もそれを真似し

て悪くなる, または, 結果とか成果は, その基となるもの以上のものにはならないという意味で, 日本の諺の“蛙の子は蛙”, “親が親なら子も子”に類似している。

S

1496. Sabe dónde le aprieta el zapato.

足のどこに 靴ずれするか 知っている

- 思慮, 分別があり, 自分の立場をよくわきまえている, 人の弱点を知っている。
- 異表現には “Cada uno sabe dónde le aprieta el zapato. 人は足のどこに, 靴ずれするか, 知っている” (筆者の諺辞典, 諺 205 には, この諺の由来, および例題が詳しく説明されているので参照して下さい), “Cada uno se rasca dónde le come. 人は刺された場所を搔く”, “Sabe dónde le hiere el zapato. 足のどこに靴があたるか知っている”, “Sabe dónde le muerde el zapato. 足のどこを靴が挟むか知っている”, “Nadie sabe dónde le apriete el zapato. 誰も他人の足のどこに靴ずれするかを知らぬ” などがある。
- スペイン王立アカデミー辞書: “saber alguien dónde le aprieta el zapato” とは, 口語的表現で, “何が都合がよいかよく知っていること”
- マリア・モリエール (スペイン語辞書): “Saber alguien dónde le aprieta el zapato.” とは, “置かれている状況を理解し, 何が都合が良いか悪いかをよくわきまえ, どのように対処したらいいのかなどもよく知っていることをいう。”

1497. Sacar el arador con pala y azadón.

鋤と鍬で 寄生虫を 引き出す

- 間違った方法で目的を達成しようとする事。
- 異表現には “No se saca arador con pala ni azadón. 寄生虫は, 鍬の刃では引き出せない” (筆者の諺辞典, 諺 1176 を参照), “No se saca arador a pala de azadón. 同訳”, “No se saca arador a pala y azadón. 同訳” などがある。

1498. Sacar la castaña con la mano del gato.

火中の栗を 猫の手で 拾う

- 他人の利益のために、危険で苦しい目に遭うかもしれない物事をする行為をたとえていう。
- 日本では、単に“火中の栗を拾う”として知られている。“岩波ことわざ辞典”（岩波書店）によると；“猫が猿におだてられて、熱い焔の中の栗をどうにか拾いあげるのを、かたわらの猿が片っ端から食ってしまう、というラ・フォンテーヌの寓話にある〈猿と猫〉を題材にしたフランスのことわざの翻訳。自分は安全地帯にいて人を利用する意の〈猫の足でもって火中の栗を拾う〉ということわざが古くからフランスにあるので、おそらくこれを踏まえてお話に仕立てたものと思われる。”と言っているが、スペインのコレアス諺集（17世紀）には、標題の諺とともに、次の異表現も見られる；“Sacar la brasa con la mano del gato o con la mano ajena. 燃えさしを猫の手／他人の手で拾う”，また、スバルピィ諺辞典（1872年）にも異表現“Sacar uno el ascua, o brasa con la mano del gato o con mano ajena. 燠／燃えさしを、猫の手で／他人の手で拾う”が収載されている。コレアスは、標題の諺にこうコメントしている；“ずる賢い猿が、自分は火傷したくないので猫の手で火中の栗を拾う”と。ここでは、フランスのことわざの〈猫の足〉ではなく、〈猫の手或は他人の手〉となっているが、“自分で立ち向かうかわりに、他人を利用して物事を遂行させ、その成果を得ることをたとえている”こうしてみると、ヨーロッパの各地には同じ意味で少し表現を変えた諺が同時期に存在していたのではないかと推測される。また、危険な物の比喩である〈火中の栗〉の代わりに〈蛇〉が用いられることもある；“Sacar del horado la culebra con la mano ajena. 穴から、他人の手で蛇を取り出す”（horado 一穴、洞穴），“El mal encantador, con la mano ajena saca la culebra. 悪党の蛇使い、他人の手で蛇を取り出す”（自分の責任のがれのために、他人を利用することのたとえ—バロス諺集、筆者の諺辞典、諺800を参照のこと）
- “故事ことわざ活用辞典”（創拓社）によると、“火中の栗を拾う”（他人の利益のために、危険をおかして物事をする愚かな行為のたとえ）というのは、“イソップ物語に、猫が悪知恵にたけた猿におだてられて、困焔裏の中の栗を拾ってやろうとして大火傷をしたという話からでたことば”であるとしている。

- スペイン王立アカデミー辞書 (2001 年) には, “Sacar castañas del fuego con la mano del gato. 火中の栗を猫の手で拾う”, “Sacar el ascua con la mano del gato. 燠を猫の手で拾う” と一緒に “Sacar las castañas del fuego. 火中の栗を拾う” (口語的表現で, 他人の利益のために, 危険な或は, 苦しい目にあうかもしれない物事をする行為をいう—スペイン王立アカデミー辞書) が収載されている。
- 類義の日本の諺には “手を出して火傷する” (余計なことに手を出してひどい目に遭うことのたとえ—故事ことわざ活用辞典), “人の禪で相撲取る” (他人のものや地位などを利用して, 自分の利益や目的を果たそうとすること—故事ことわざ活用辞典), “人の太刀で功名する”, などがある。

1499. Sacar lo que el negro en el sermón: los pies fríos y la cabeza caliente.

お説教で黒人が得たものは 冷えきった足と
熱くなった頭

- 人の話を聞いていても, 無知であったり頭が鈍いと何を話しているのか理解できない。(バロス)
- イリバレン (格言の由来) によると; “物事を何も理解できないままでいる状態を指している。ある教会のお説教を聞きに行った黒人が, 足を冷やし, 頭をぼうっとさせてそこから出て来た。というのも, 足は裸足のままだったのですっかり冷えてしまった。また, 出来の悪いおつむで説教師が喋っていたことを一生懸命理解しようとしたので, 頭をがかかさってしまったという訳である。”
- コバルビアスの “宝典” には, 標題の諺はでていないが, “el negro—黒人” を言及しているのはある; “Aunque negros, gente somos. 黒人かもしぬが, われわれだって人間だ” (どんなに貧しく, 身分が低かろうが軽蔑してはならぬ—コバルビアス) コバルビアスは, “negro—黒” という色は “infausto—不吉で, triste—寂しい色” で, “negra ventura—不運”, “negra vida—不運な人生” などという表現があるという。

1500. Salamanca, a unos sana y a otros manca y a todos deja sin blanca.

サラマンカでは ある者は癒^{いゆ}され 別の者は不具にされ
全ての者は一文無しにされる

- サラマンカにある大学はとても有名で、世界中から大勢の学生がやってくるのでこういう諺ができた。(パロス)
- コレアス(諺集)は、標題の諺を評してこう言う；“サラマンカには、高名な大学があり、ヨーロッパ及びインディアス(スペイン統治時代の新大陸)などからたくさんの人が学びにやってくる。その中には、人文科学でひとかどの者となり有名になりすぎるが、学問をきちんと習得できなかつたりする者もいた。多かれ少なかれほとんどの者が、もってきた金を使い果たす羽目になる。”と。
- サラマンカは、スペイン西部にある県都で、コバルビアス(宝典)によると、サラマンカ大学は、Alfonso 王が創立した大学で、その孫の Fernando 聖王が1240年頃にPalenciaからサラマンカに移したそうである。今日でもサラマンカ大学には各国から多くの留学生が学びに来る。古い石だたみの町で、落ちていて研究ができる雰囲気漂っている。

1501. Salir (El) de la posada es la mayor jornada.

宿から出るのが 一番の仕事

- 何かを始めることが、一番骨が折れる仕事であるということ。(パロス)確かにそうである。どんな些細なことでも始めるのは面倒だが、一度走り出したらその後は、流れにさえなれば、割合簡単に事は運ぶものである。何かを始めることを躊躇している人に、まず始めようと元気づけている。
- 類義の諺には、次のように多数ある；“Buen principio, la mitad es hecha. 良いでだしは、半ば完成したようなもの”(何かを始める時は、最初がいちばん難しく、骨が折れるものである一筆者の諺辞典、諺167を参照)，“El primer paso es el que cuesta. 最初の第一歩が、いちばん大変”，“El comenzar las cosas es tenerlas medio acabadas. ものごとを始めるということは、それを半半分終えたようなもの”(始めるという行為は、それだけでもう目的の半ばをなしとげたようなものである、

同諺辞典, 諺 239 を参照), “El comer, el rascar y el hablar, todo es comenzar. 食べること, 掻くこと, 話すこと, あらゆる事は始める行為から始まる”, “Lo que no se comienza, nunca se acaba. 始めないことは, 決して終わらない” (最初の難関を突破すれば, 容易に目的を達成できる, 同諺辞典, 諺 768 を参照) など。しかし, それだけでは充分でないと次の諺は警告している, “No basta comenzar bien, ni sirve demediar bien, si no se acaba bien. よく始めること, よく半ばに達すること, それだけでは充分ではない, もしよく終わらせるのでなければ” (同諺辞典, 諺 1060 を参照), また, このような人も度々見られる, “Corrida de caballo y parada de borrico. 始は駿馬の如く, 後は驢馬の如し” (“始めよし後わるし”) の意味, 同諺辞典, 諺 305 を参照のこと)

- 標題の諺と類義の日本の諺には “始めが大事”, “始めよければ終わりよし”, “百里の道も一歩から”, “大海の水も一滴から”, “始め半分” など多数ある。

1502. Salir de Málaga y entrar en Malagón.

マラガから出て マラゴンに入る (一難去って又一難)

- 一つの災難をやっと切り抜けたと思ったらまた別の災難に見舞われること。
- 異表現には, “Salió de Málaga y entró en Malagón. マラガを出たら, マラゴンに入ってしまった” がある。また, 類義の諺には次のように多数ある; “Guardóse de la mosca y comiólo la araña. 蠅から逃れて, 蜘蛛に食べられる” (筆者の諺辞典, 諺 632 を参照のこと), “No es bueno salir de un lodo y entrar en otro. 一災から逃れたのに, 二災に入るのは良くない” (折角難事を切り抜けたのに, また別の難事を求めるのはよくない, 同諺辞典, 諺 1084 を参照) など。コレアス諺集にも次のような諺が見られる; “Sacar un pie del lodo y meter otro. 泥から片足引き抜いたら, 別の足が入った”, “Salir del charco y entrar en el lago. 水たまりを避けて, 湖に入る” (一つの災難を切り抜けた途端, より大きな災難にぶつかった), “Huí de la ceniza y caí en las brasas. 灰を逃れて, 燃えさしに陥る” (同諺辞典, 諺 699 を参照), “Huí de la llama y caí en las brasas. 炎を逃れて, 燃えさしに陥る”, “Huir del relámpago y dar en el rayo. 稲妻を避けて, 雷光にでくわす”, “Huir un peligro y dar en otro. 危険を逃れて, また別ののでくわす” など, また, スバルビィ諺辞典には “Salir de Laguna y entrar en Mojadas. ラグーナから逃れて, モハー

グに入る”（難事を切り抜けた途端、別のもっと大きな予期していなかった難事にぶつかってしまったという意味。“Laguna と Mojadas とは、旧カスティーリャ地方にあるバリャドリード県のあまり重要でない町の名前である—スバルビィ”がある。パロス諺集にも“Salir de las llamas y caer en las brasas. 炎を避けて、燃えさしに陥る”，“Saltar de la sartén y dar en las brasas. フライパンから飛び出して、燃えさしに陥る”，“Salir de lodazales y entrar en cenagales. ぬかるみを避けて、泥沼に陥る”，“Salir del lodo y caer en el arroyo. 泥を避けて、小川に入る”，“Descalabrar al alguacil y acogerse al corregidor. 警官にけがを負わせて、代官に逃げ込む”（この一連の諺は、危険或は、不都合な事態から逃げたのに、もっと別のより悪い事態に陥ることを意味する—パロス）など、標題と類義の諺が収載されている。

- セレスティーナ第一幕では、この諺を念頭においてカリストが奉公人と次のような会話をする；“... Siempre lo vi, que por huir hombre de un peligro, cae en otro mayor. 人は一つの危険をのがれようとして、別のもっと大きい危険に落ちこむものだという事は百も承知だ...”（魔女セレスティナ、大島正訳）
- こちらにも類義で同じような表現の次の諺がある；“一災起れば二災起る”，“火を避けて水に陥る”，“虎口を逃れて竜穴に入る”など。

1503. Salud (La) no es conocida hasta que es perdida.

健康は 損なうまで 気づかない

- 失うまでは、気にもとめないその他諸々の事と同じように。（パロス）
- コレアス諺集には、異表現で“La salud no es conocida sino cuando es perdida. 同訳”がある、また、健康についての諺が次のようにある；“Salud come, que no boca grande. 健康が食べるのであって、大きな口ではない”，“Salud es la que juega, que no camisa nueva. 健康が遊ぶのであって、新しいシャツではない”など、同様に、パロス諺集には、“Salud y alegría, belleza cría; atavío y afeite, cuesta dinero y miente. 健康と喜びが、人を美しくさせ、おめかしと化粧は、金がかかるし、人を偽る”（本当の美しさは、健康な人に見いだされる—パロス），“Salud, y días, y ollas, componen cosas. 健康、年月、そしてナベ料理が物事を作る”（物事に冷静に取り組むと、人は将来に注意を向けるのである—パロス）などの諺が収載さ

れている、いずれも肉体及び精神の健康の大切さを謳っている。スバルビィ諺辞典では“A poco dinero, poca salud. 少しの金に、少しの健康”(少々の元手で、価値あるものを手に入れるのは不可能である—スバルビィ、筆者の諺辞典、諺 79 を参照)、“El bien no es conocido hasta que es perdido. 幸福は、去ってしまうまで、分らない”(人は持っているものを心から享受しているとは限らない、失って初めて、その大切さに気づくのである—スバルビィ、筆者の諺辞典、諺 133 を参照)など、健康に関連した諺が見られる。

- 旧約聖書のシラ書でも、次のように“健康”は、何ものにも勝るものであると称賛している；“Más vale pobre con buena salud que rico con el cuerpo enfermo. 貧しくとも健康で体力のある方が、裕福で病気に苦しんでいるよりはよい。Prefiero la buena salud al oro, y el buen ánimo a las perlas. 健康で丈夫な体は、あらゆる黄金にまさり、強じんな精神は、莫大な財産にまさる。No hay riqueza mayor que la buena salud, ni bien más grande que la felicidad. 体の健康にまさる富はなく、心の喜びにまさる楽しみもない。”(30-14-17)

1504. Sal vertida, nunca bien recogida.

こぼした塩は 全部は拾えない

- 誰かのうわさ話とか中傷するような話しがでると、世間はその話をなかなか忘れないものである、また、ある事が公になり、人々を黙らせようとやっきになっても、何かがいままで尾を引くものである。(バロス) 一度やってしまったこととか、起こってしまったことを、それ以前の元の状態に戻すことは不可能であるということ。
- 類義の諺には“Agua vertida, nunca bien recogida. 覆水盆に返らず”(別れた夫婦はもと通りにはならない、転じて、やってしまったことは取り返しがつかない)、“Amigo reconciliado, enemigo redoblado. 仲直りした友は、強敵となる”(一度友情が壊れると、元の友情を取り戻すことは難しい、筆者の諺辞典、諺 59 を参照)、“Campana cascada nunca sana. ひびが入った鐘は、決して治らない”(一度ひびの入ったものを元どおりにするのは難しい、同諺辞典、諺 210 を参照) などがある。
- “覆水盆に返らず”は、去っていった妻が夫、呂尚りょしやうに復縁を求めたが、夫は、盆の水をこぼし、その水をもとに戻すことができたら願いに応じようと言ったという中国の故事による。(故事ことわざ活用辞典)。類義の諺には“破鏡再び照らさず”、“割った

茶碗を接いでみる”（取り返しはつかないことと知りながらも、なお未練を残すことのとえ—故事ことわざ活用辞典），“落花枝に還らず”（過ぎ去ったことは二度と返ってはこない、また、別れた男女の仲は元に戻ることはない”（同活用辞典）などがある。

1505. Sanan lanzadas y no palabras malas.

槍傷は治るが 悪口は治らない

- 無礼な言葉はめったに忘れられない。（バロス）陰口を叩く者を戒めている、また、悪口雑言がどんなに人を傷つけるかを言う。（スバルビィ）
- コレアス諺集には、次の異表現が見られる；“Sanan llagas y no malas palabras. 傷は治るが、悪口は治らない/Sanan cuchilladas y no malas palabras. 刃傷は治るが、悪口は治らない”
- 類義の諺には “Cosa mal dicha no se olvida; o cosa mal dicha no cae en tierra. 人は決して悪口を忘れぬ；悪口は決して地に朽ちぬ”（人は、自分に言われた悪口と、言った人のことは決して忘れないものである—コレアス、筆者の諺辞典、諺 309 を参照），“Palabra de boca, piedra de honda. 口から出た言葉、ぱちんこではじいた石”（遠くまで飛び、人を傷つける—バロス、筆者の諺辞典、諺 1244 を参照），“Palabra y piedra suelta no tiene vuelta. 放たれた言葉と石は戻ってこない”（同諺 1244 を参照），“Palabra en el corazón, nunca quita la pasión. 心に刺さった言葉は、決して忘れられない”（屈辱の言葉は決して消え去らない、同諺 1244 を参照）などがある。
- これほどまでに威力を持つ言葉をもはやわれわれは軽々しく口に出せなくなるであろう。旧約聖書では、九種類の幸運な人のひとりが “¡Dichoso el que no peca con la lengua.口を滑らせて失敗することのない人、...”（シラ書 25-8-9）だという。また、ここでは、“Las malas palabras—舌禍” というタイトルで陰口の絶大な破壊力について延々とこう述べている；“...porque han sido la ruina de muchos que vivían en paz!（うわさして回る者や二枚舌の者は）平穩に暮らしている多くの人々を破壊させたから。Las calumnias han perjudicado a muchos y los han hecho ir de país en país; 陰口は多くの人の心を乱し、国から国へと人々を追い立て、han destruido ciudades fortificadas y arruinado las casas de hombres poderosos.

堅固な町々を破壊し、権力者たちの家を破滅させた。Las calumnias han sido culpables de que mujeres ejemplares hayan sido repudiadas. 陰口は貞節な妻さえ離婚に追い込み、haciéndolas perder el fruto de su trabajo. 彼女らが苦勞して得たものを奪い取った。”(シラ書 28-13-16) “Las heridas causadas por azotes se quedan en la piel.; las heridas causadas por la lengua rompen los huesos. 鞭で打つと皮膚が裂け、舌で打つと、骨さえ砕ける。“Muchos han muerto a filo de espada, pero más aún por culpa de las malas lenguas. 多くの人が剣のやいばに倒れたが、その数は、舌のやいばに倒れた人には及ばない。”(シラ書 28-17-19) 最後に、人々にこう戒めている；“...pon también puerta y cerrojo a tu boca y pesa las palabras que digas. Ten cuidado de no pecar con la lengua, para no caer en poder de tu enemigo. お前の口には戸を立てて、かんぬきを掛けよ。お前の言葉は秤に掛けて、慎重に用いよ。口を滑らせないように注意せよ。待ち構えている者の餌食になるな。”(シラ書 28-24-26)

- わざわざ人に嫌われるような言葉を吐くよりは “Cortesía de boca, gana mucho a poca costa. 口先きの儀礼は、元手はかからぬし得すること多し”(人と争わずに上手に世を渡っていくためには、たとえ心がこもってなくても、礼儀正しくしたほうがよい—筆者の諺辞典、諺 306 を参照) と、この諺はおしえてくれる。
- 日本の諺でも上記に述べたような言葉の持つ威力をこう表わしている；“舌の剣は命を絶つ”，“三寸の舌に五尺の身を滅ぼす”，“舌は禍いの門”など。史記には世間の評判や中傷には恐ろしい力があることをたとえて“衆口金を樂す”(多くの人が口をそろえて言うことばは、それが間違っただのもであっても、堅い金をも溶かしてしまう—故事ことわざ活用辞典)がある。この異表現として“衆心城を成し衆口金を樂す”もある。注：“樂す” —溶かすのこと。

1506. Sangre (La) se hereda y la virtud se aquista.

血は受け継がれるもの 美德は獲得するもの

- 悪徳を改めたがらぬ名門の貴族を咎めている。(スバルビィ)
- バロス諺集には、“美德”ならぬ“悪徳”の方でこうある；“La sangre se hereda y el vicio se pega. 血は受け継がれ、悪徳は染まるもの”(悪習は簡単に身につくものである、たとえ良い家柄に生まれ、良い手本を近くで見聞きしてきた者でさえも—

ロス)

- 例題：ドン・キホーテ第二部 42 章，サンチョに向かい家柄の賤しさを誇りに思え，賤しい家に生まれて，法王や皇帝の位に昇った者もたくさんいる，徳にそむかぬ行いをするなら，貴族の行いをする者を羨むことはない，とドン・キホーテが教え諭す；
 “...; porque la sangre se hereda, y la virtud se aquista, y la virtud vale por si sola lo que la sangre no vale.... なぜと申すに，血は親に受けるもの，徳はみずから積むものでな，徳は血が持ちえない価値を必ず持つからじゃ。”(続編二，永田寛定訳) 注：“se aquista-adquiere, 獲得する”
- 美德は，それだけで価値があるが，名門の血は，美德を伴わなければ価値がないということ。名門の家に生まれるのは，運であって選べないが，美德は誰でもその気になれば獲得できるとおしえている。日本人の最高の徳だった忠と孝を説く諺には“家貧しくして孝子顕る”(原文は<世乱れて忠臣を識る>と続く，出自は<宝鑑>，故事ことわざ活用辞典より)がある。家柄を自慢するものをあざけた諺が次のようにある，“家柄より芋柄”(家柄は食えぬが，芋茎は食えるだけ値打ちがある—故事ことわざ活用辞典)，“芋茎は食えるが家柄は食えぬ”など。

1507. Sardina que el gato lleva, gandida va.

猫がさらっていったイワシは 消化されてしまう

- 一度なくした物は，戻ってはこないということ。
- スバルビィ諺辞典には，異表現の“Sardina que lleva el gato, tarde o nunca vuelve al plato. 猫がさらっていったイワシは，後で皿に戻る，或は絶対に皿には戻らない”(いったん消えてしまったら，もう取り返す望みはない—スバルビィ)
- “gandida-digerida 消化される”

1508. Sastre (El) del cantillo, que cosía de balde y ponía el hilo.

角の仕立て屋は ただで縫ってあげて
自前の糸まで 使った

- 他人に手を貸してあげた者が，そのために自分の労力，金まで使うことをたとえて言う。
- イリバレン(格言の由来)によると；“El sastre del cantillo—(道の)角の仕立て

- 屋”の代わりに“El sastre del Campillo”ともいう。この場合の“El Campillo”は、バリャドリード（スペインの北西部の県）にある村の名前と推測されるが、“cantillo”には、esquina—角, cantón—隅, encrucijada—四つ角, 四つ辻などの意味がある。異表現として、コメディ (Comedia Eufrosina) に次のせりふが出てくる, “No quiero ser el sastre de la encrucijada, que no le pagan la hechura y pone el hilo de su casa. 仕立て代を払ってもらえず, その上自分の店の糸まで使ったあの四つ角の仕立て屋にはなりたくない。”, また, 次のような異表現が“Dictados tópicos de Extremadura エストレマドゥラ (スペイン中西部の地) の常套句” (Antonio Rodríguez Moñino, Badajoz, 1931) に見られる, “Ser como la costurera de Mieras (Cáceres), que bordaba de balde y ponía la seda. 刺繍をただでして上げて, 自前の絹まで使ったミエラスのお針子のものである”, “El sastre de Ciguñuela, que cosía de balde y ponía la seda. ただで縫ってあげて, 自前の絹まで使ったシグニュエラの仕立て屋”など, 一番古いと思われるのは“Marqués de Santillana の格言”に記載されている“El alfayate del cantillo, hacía la costura y ponía el hilo. 角の仕立て屋が仕立てをし, 自前の糸を使った”であろう。注: alfayate—仕立て屋, hacía-hacia のこと—筆者
- コレアス諺集には次のような異表現が見られる; “El sastre de Ciguñuela, que pone la costa y hace de balde la obra. Ciguñuela の仕立て屋は, 材料費も負担してただで, 仕立てもする”, “El sastre de Peralvillo, que hacía la costura de balde y ponía el hilo. Peralvillo の仕立て屋は, ただで縫ってあげて, 糸まで自分のを使った”, “El sastre de Piedras Albas, que ponía el hilo de su casa. Piedras Albas の仕立て屋は, 自分の店の糸を使った”など。注: Peralvillo-Ciudad Real にある村, Piedras Albas-Cáceres にある村, Ciguñuela も Extremadura 地方にある村の名前と思われる—筆者
- “宝典” (コバルピマス) には次の異表現が見られる; “El sastre del Campillo, o del cantillo, que ponía de su casa el hilo. Campillo の仕立て屋/角の仕立て屋は, 自分の店の糸を使った。”, “El alfayate de la Adrada, pone el hilo de su casa. Adrada の仕立て屋は, 自分の店の糸を使う”注: “alfayate” は, 仕立て屋を意味する古い言葉—筆者
- 例題: ドン・キホーテ第一部 48 章, 和尚と役僧とが騎士物語を論じ, それらの本を

批判している、そして、自分も騎士物語を書いていたが、今は中断しているという役僧がこう言う、“...deste modo vendrá a ser un libro, al cabo de haberme quemado las cejas por guardar los preceptos referidos, y vendré a ser el sastre del cantillo. わしの本も同じ理屈で、さきに述べた本義を守るために、どれほど骨を折ろうと、結果は知れとるし、くたびれもうけをするだけの話だとな。”（正編三、永田寛定訳）

1509. Secreto de dos, sábelo Dios; secreto de tres, toda res.

二人の秘密は 神のみが知る

三人の秘密は 誰も彼もが知る

- 二人以上の秘密を守るのは極めて難しいということ。
- “secreto—秘密” に関しては、コレアス諺集にこういう諺がある；“El secreto de tu amigo guardarás, y el tuyo no le dirás. 君の友人の秘密は守りなさい、自分の秘密は言わないように”，“Hombre cuerdo, lo público hace secreto. 賢者は周知のことでも、自分の口からは言わない”，“Secreto a voces. 秘密でないことを秘密にすること／公然の秘密”，“Secreto de oreja no vale una arveja. 耳から入った秘密は、なんの値打ちもない”，“A quien dices tu secreto, das tu libertad y estás sujeto. 秘密をうちあけた者に、自由も上げて、束縛される”（筆者の諺辞典、諺 83 を参照）などがある。
- 旧約聖書の“箴言”では、“El chismoso todo lo cuenta; el discreto guarda el secreto. 悪口を言い歩く者は秘密をもらす。誠実な人は事を秘めておく。”（11-13-14），“Defiéndete de quien te acuse, pero no descubras el secreto ajeno. 自分のことについて友人と言い争うのはよいが、他人の秘密を漏らしてはならない。”（2-5-9-10）と、われわれに警告している。
- 一度口に出したことは、非常に早く伝わって取り返しがつかないことをたとえて“駟も舌に及ばず”が論語にある。故事ことわざ活用辞典によると、“駟”は、四頭立ての馬車で、昔の中国で最も早い乗り物。この馬車で追いかけても取り戻すことが出来ないという意味で、それほど早く流布されるということ。

1510. Sepultura de enemigos, venganza de vivos.

敵の埋葬は 生きている者の報復

- 我慢強ければ、たいい欲するものを手に入れることができる。(パロス)
- 類義の諺には “Siéntate a la puerta de tu casa y verás pasar el cadáver de tu enemigo. 自分の家の戸口に坐っていたら、敵の死体が通り過ぎるのを見られるだろう” (アラビアの格言—パロス) がある。自分の敵だとずっと思っていた者がついに死んだという知らせを聞くまでは生き長らえなくてはならない、それには辛抱強く待つことが大事であるということ。

1511. Ser casta, para buena no basta.

貞淑であるためには 善良だけでは足りない

- 外からそう見えなくては充分とはいえないし、他の美点も必要である。(パロス)
- 類義の諺には、“Buena fama, hurto encubre. 名声は、盗みを覆い隠す” (世間での良い評判が大事である、何か汚点があっても隠すことができる—筆者の諺辞典、諺152を参照して下さい)、“Cria buena fama y échate a dormir. 名声を得れば安閑としていられる”、“La buena mujer no alcanza la buena fama solamente con ser buena, sino con parecerlo. 善良な女は、ただ善良であるだけでなく、善良に見えなければ、世間の評判は得られぬ” (この諺は、ドン・キホーテ第二部22章にもでてくる。ここでは、女は世間の目に善良とうつることが大事であると強調されている) などがある。また、こういう諺もある “Seso en prosperidad, amigo en adversidad y mujer rogada casta, raramente se hallan. 幸運な時の知力、逆境の時の友人、ちやほやされている女の純潔などは見つけるのが難しい”
- いかにもスペインの諺らしく世間でどう思われているかが大切であるという。こちらにも類義の諺がある；“浮世は衣装七分” (世間では中身よりも外見が重んじられる)、“世間は張り物”、“世間は飾り物” など。

1512. Ser como un pino de oro.

輝く髪飾りのようである

- 熟語 “un pino de oro” は、直訳すると “金の松” である。この解釈には、二通りの

説がある。スバルビィによると、；“勇ましく豪気であてやかな人を比喻する成句である。松は、その高さ、ぴんと立った姿から、勇ましさを連想させる、また、樹冠は、金色であることから、人の華やかさ、優雅さを思わせる。この成句は、気が利いていて、とても意味深長である。クレメンシン（Diego Clemencin, ドン・キホーテの注釈者であり、研究者一筆者）は、昔、女性が髪にさした飾りものを“un pino de oro”と名付けていると解釈している。”ここでのクレメンシンの説が現在でも使われている。

- スペイン王立アカデミー辞書：昔、女性が髪にさした飾り物の一種。
- 例題：ドン・キホーテ第二部 49 章、サンチョの妻、テレーサが宮廷の若い使者を指して和尚とサンソン・カルラスコにこう言う，“Respondió Teresa que se viniesen con ella a su casa y verían el mensajero, que era un mancebo como un pino de oro... テレーサは、おらと一緒にうちへ来てくれ、その使者に会えるからね、その男は、かんざしの金の玉みてえに、美男子だ、... と答えた。”（続編三、高橋正武訳）

1513. Ser más ladrón que Caco, o tan ladrón como Caco.

カクスよりもっと 大泥坊である

カクスのように 大泥坊である

- 高名なギリシャ神話の大盗“Caco-Cacus カクス”と比較して大泥坊であるという成句。カクスは、巧みなやり方で盗みをはたらいていた。
- クレメンシン（ドン・キホーテ第一部、注：39）によると，“カクスは、Vulcano—ウルカヌス（ローマ神話の火と鍛冶の神、ギリシャ神話の Hefesto—ヘパイストス—筆者）の息子で、盗みをはたらいていた。Hércules—ヘラクレスがスペインから家畜をつれて戻ってきた時、カクスはヘラクレスから牛を盗んで洞窟に隠しておいた。しかし、家畜のうなり声からばれてしまい、ヘラクレスの手にかかってカクスは死ぬはめになる。ギリシャ語で<Caco>とは、悪党、邪悪なという意味。”
- 例題：ドン・キホーテ第二部 49 章、太守になったサンチョは、村を巡視している時に、けんかしている二人の若ものに出会った。その一人からけんかのもとをきくと，“...y el socarrón, que no es más ladrón Caco ni más fullero Andradilla, no quería darme más de cuatro reales; ... ところが、この畜生め、カクスほどの大泥坊でも、アンドラディーリャほどの大いかさま師でもねえくせに、四レアルの上は

出せねって吐かずだ。”(続編三, 高橋正武訳)

1514. Ser tortas y pan pintado.

なんの造作もないことである

- スペイン王立アカデミー辞書：“Ser algo tortas y pan pintado.”とは、口語的表現で損害、労力、不愉快な出来事、出費、失敗など諸々な事が他のそれらと比較して全然たいしたことがないという意味。
- 例題1：ドン・キホーテ第二部17章，ライオンと闘おうとするドン・キホーテに思いとどまるように頼むサンチョは，以前の冒険は，今度のくわだてに比べたらなんでもなかったと言う，“...le suplicó desistiese de tal empresa, en cuya comparación habían sido tortas y pan pintado la de los molinos de viento y la temerosa de los batanes,... そんなくわだてを思いとまってくれろ，これに比べたら，風車に立ち向かったことも，布ざらしを攻めようとした無鉄砲も，..... 画にかいた餅とパンにひとしいからと，主人に取りすがった。”(続編一, 永田寛定訳) 注：“Ser tortas y pan pintado”の直訳は，“画にかいた種なしパンとパン”の意味。ついでながらこういう諺もある，“A falta de pan, buenas son tortas. パンがなければ種なしパンで結構。”—筆者
- 例題2：ドン・キホーテ第二部63章，ドン・キホーテとサンチョが軍船を見学した時に起こった事は，まさに悪魔の仕業のようであった。裸の水夫たちが総動員で働く姿を見て，サンチョはいたく驚くが，“... ; pero esto todo fueron tortas y pan pintado para lo que ahora diré. しかし，こんなことは，次に述べようすることに比べたら，物の数でなかった。”(続編三, 高橋正武訳) 注：二つの例題から見ても，標題の成句は，常にある事とある事を比較してどちらかの方が比較にならないほどやさしいという意味で使われている。

1515. Si bien bailo o mal bailo, mi cuerpo solazo.

上手であろうと 下手であろうと

楽しく踊ればよい

- 他人にどう思われようと，自分の思い通りに振る舞う人をいう。(パロス)
- 類義の諺には，“Ande yo caliente y riase la gente. 自分が温ければ，人は勝手に

笑うがいい”（人が何と言おうとも、自分が心地よければいい、人の目なんか全然気にしないということ—筆者の諺辞典、諺 66 を参照のこと）

1516. Si bien canta el abad, no le va en zaga el monacillo.

坊主が上手に詠えば 小坊主も引けを取らぬ

- 人に後れをとらないという口語的成句。
- スペイン王立アカデミー辞書：“no ir, 或は, no irle, alguien en zaga a otra persona; o no quedarse en zaga—（人）に引けを取らない, 後れを取らない。”
- 例題：ドン・キホーテ第二部 25 章, いなくなったロバを捜すためにロバの長鳴きを真似した村人二人は, あまりにも上手にできたのでお互いにほんもののロバと間違える, そのふたりの鳴き声の上手なことをたとえてこの諺を一人が言う, “...<pues si bien canta el abad, no le va en zaga el monacillo.>...<なぜというに, 和尚がいい声にしても, 寺小姓は負けずに歌うからな。>”（続編二, 永田寛定訳）

1517. Si caí, y me quebré el pie, mejor me fué.

もし躓いて 足を折ったならば よいことのため

- 不幸と思っていたことが, 幸せになったり, 幸せと思っていたことが不幸になったりするように, 人間の幸不幸というものは, 表裏をなしているのが常であるということ。
- 類義の諺には “El buey que me encornó, en buen lugar me echó. 牛のひと突きが, 福をもたらした”（不運な出来事と思われたことも, 幸運の原因となることがある—筆者の諺辞典, 諺 171 を参照のこと）, “No hay mal que por bien no venga. 福のために来ない禍はない”（禍いだと思っていたことが, 結果的には福であった）などがある。
- 例題：セレスティーナ第 7 幕, セレスティーナは, カリストの奉公人の一人, パルメノの母親と以前はいっしょに仕事をしていたことがある, また, 一緒に捕り方につかまって罰をうけたこともあるという, “...Que mil veces la oía decir: si me quebré el pie, fue por bien, porque soy más conocida que antes. ...また, お袋さんから耳にたこができるほど聞いたね, <もしあたしの足が破れたとしても, あたしのためにはよかったのさ。あたしは前より顔が売れるからね>とね。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

- ぴったり同じ主旨の日本の諺には“不幸は幸福の基”，“大吉は凶にかえる”がある，また，類義の諺には，中国のおしえである“人間万事塞翁が馬”（人間の一生のうちでは，何が幸せになるか不幸になるかわからない—故事ことわざ活用辞典）や“禍福は糾える縄の如し”（史記），“貧乏難儀は時の回り”，“楽は苦の種 苦は楽の種”などがある。これらの諺は，人間の一生は経ってみないと分からない，その時その時の状況に一喜一憂などせずに平常心を保つことが大事であるとおしえてくれる。

**1518. Si da el cántaro en la piedra, mal para el cántaro;
si da la piedra en el cántaro, mal para el cántaro.**

もし水瓶が 石に当たれば 災難は水瓶にいくし，
石が水瓶に当たっても 災難は水瓶にいく

- 力の弱い者がいつでも災難を被るということ。
- 次のように異表現と諺研究者の注釈が見られる；“Si da el cántaro en la piedra, o la piedra en el cántaro, mal para el cántaro. 水瓶が石に当たっても，石が水瓶に当たっても災難は水瓶にいく”（けんかも口論も力の強い者とは，しない方が良い。弱い者がいつでも負けるから—スバルビ諺辞典），“Si la piedra da en el cántaro, mal para el cántaro, y si el cántaro da en la piedra, también se quiebra en ella. もし石が水瓶に当たれば，災難は水瓶にいく，水瓶が石に当たれば，水瓶が壊れる”（勢力の強い者とは争うな，堅い石と同じだから。反対に貧乏人は壊れやすい出来の悪い水瓶と同じである。だから決して勝ち目はない—コバルピナス，宝典），“Si la piedra da en el cántaro, mal para el cántaro, y si el cántaro da en la piedra, mal para el cántaro no para ella. 標題の訳と同じ”（コレアス諺集）など。
- 同義の諺には“Siempre se quiebra la sogá por lo más delgado. 綱が一番細い部分が切れる”（いつでも弱い者が損をする—筆者の諺辞典，諺 1385 を参照）がある。
- 例題 1：ドン・キホーテ第一部 20 章，ドン・キホーテがサンチョに主人と下僕，殿様と家来，騎士と従士の違いを説いて聞かせる，“...porque, de cualquier manera que yo me enoje con vos, ha de ser mal para el cántaro.... なぜと申すに，わしがそちに腹を立てることがあれば，いかなる場所にも，不幸は水瓶に行こうからじゃ。”（正編二，永田寛定訳）
- 例題 2：ドン・キホーテ第二部 43 章，島の太守となるための心掛けをドン・キホー

テがサンチョに長々と諭す。サンチョは、いつでも権力のある者が勝つので心配ないと得意の諺を次々と披露する中の一つ，“...y <si da el cántaro en la piedra o la piedra en el cántaro, mal para el cántaro. ...<水瓶が石に当たろうと石が水瓶に当たろうと、損するは水瓶...”（続編二、永田寛定訳）

- いつでも弱い者が強い者や悪党の代償を支払わなければならないという主旨の諺には“皿嘗めた猫が科を負う”，“米食った犬が叩かれずに糠食った犬が叩かれる”，“網にかかるは雑魚ばかり”などがある。



Madrid (España).